様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９ＫＫ０００１

研究課題名（和文）サードフォースの美術史　1880-1920ー在英日本人ネットワークの研究

研究課題名（英文）Third Force in a History of Modern Japanese Art

研究代表者
五十殿　利治（Omuka, Toshiharu）

筑波大学・芸術系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：６０１７７３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,500,000円

研究成果の概要（和文）：　国際共同研究の実施期間の大半の時期について、日英両国における対応策の相違があるコロナ禍によって研究活動に少なからぬ支障がでたことは否定できないが、オンライン会議などを通じて交流を促進することを目指した結果、海外共同研究者が参加する公開研究会が実現して、予定されていた目標が概ね成就したといえる。
　研究課題ではとりわけ美術史上におけるサードフォース、第三勢力という視点を設定することによって、これまで個別的な事象であったパトロン、収集家、メセナ、あるいは前衛に対する後衛を周辺的な存在とみなさずに、一括りのカテゴリーとして考察する対象とみなすため、より美術史への動態にアプローチが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　美術史の形成については、美術家と美術作品が中心に記述される。一概に否定されないが、歴史の実相に照らしてみるならば、とうぜん作品の生成にさまざまな要因が作用している。その要因、とくに人的な交流を重視して、たとえばパトロンや収集家といった属性ではなく、サードフォース、つまり第三の勢力として考察する視点を設定することで、美術史の周辺とみられる現象を有力な項目として算入することができる。とくに日英美術交流については従来の研究も手薄であり、また第一次世界大戦後に顕著になるが、パリ在住日本人における美術家の大きな割合と好対照で、ロンドン在住日本人にはビジネス関係者が多く、その影響の検証の意義がある。

研究成果の概要（英文）：Almost all through the period of this JSPS research project, with differences in countermeasures between Japan and the UK, undeniably the COVID-19 disaster affected our research programs to no small extent. Nevertheless, we sought for collaborative research activities by online meetings and it turned out that the planned goals were largely achieved with open online meetings in which the overseas joint researcher participated.
　For the subjects of this project, in particular, by setting the perspective of the third force in art history, we came to consider it as a comprehensive category, instead of viewing it as a peripheral existence such as patrons, collectors, mecenas and arriere-guard against avant-garde, which were previously seen as individual phenomena. By considering it as a research object, it became more possible to approach the dynamics of art history more.

研究分野：美術史

キーワード：日本近代美術史　日英美術交流　ジャポニスム　ロンドン留学　日英博覧会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近代日本と西欧との文化交流の歴史は近代日本史の核心的な側面を形成しているが、美術史研究においては主要な研究成果が日本とフランスの美術交流史に集中しており、比べて日本とイギリスの美術交流に関する研究はいまだ少ない。長らく中村義一の明治洋画とイギリス美術についての著作（1976 年）がほとんど唯一といっていい総論であり、以後 1980 年代から 1990 年代にかけて高橋裕子、河村錠一郎、谷田博幸などによる 19 世紀イギリス美術の研究が進展した。明治以降の渡英画家に関する研究も進められてきたが、個別の研究があるだけで、広範な視野からの総体的・体系的な議論として深められていないうらみがある。巨匠や美術運動の展開に主眼をおくモダニズム史観を脱却して、渡英美術家の活動とそれを支えた日本の政財界人、華族の子弟、収集家、芸人らのネットワークの内実を明らかにし、このネットワークが生み出した、いわば「制度」外の美術史、「サードフォースの美術史」を目指すことにより、芸術制作が孤独な密室の作業とみえるものの、現実には多様な人々の交流のなかで創作され、それがいかに日本近代文化のダイナミズムを担っていたのかを学術的問いとして追究する必要がある。

２．研究の目的

(1) 本研究は、この研究主題の開拓者である渡辺俊夫から教示を得て、セインズベリー日本藝術研究所と連携し、この国際協力ネットワークを通じて共同研究を行うことによって、これまで「制度」の外での制作として看過されてき渡英日本人画家の業績を明示し、国際的な先駆的研究を目指す。また、画家たちが世界の金融の中心地ロンドンに集まった日本の政財界人、華族の子弟、商人、収集家、職人、芸人らのネットワークのなかで制作し、そのネットワークが制作活動、美術品収集、人的・文化的交流を可能とした事実に着目する。

(2) 美術家同士の交流に焦点を当ててきた従来の美術史研究とは異なる「サードフォースの美術史」を提示することは、本研究独自の視点であり、創造的行為でもある。その新たな美術史は、近代日本経済史、外交史、芸能史等とも接続し、従来の美術史研究の枠を超えたものとなることが期待される。

３．研究の方法

(1) 研究代表者・研究分担者の専門性や業績に照らし、主として研究上重要な位置付けにある画家を各研究者に割り当てることによって、複層化したネットワークのダイナミズムの解明に向けて重点的な調査研究を行いつつ、その成果を海外共同研究者の参加を得て、積極的に共有することによって、国際共同研究としての研究交流を促進する。

(2) 研究代表者の五十殿は、皇居の二重橋を造営した久米民之助の子息であった久米民十郎に焦点を当て、ロンドンがグランドツアー先となり、近代日本を形成する「若様」にもたらした国際的、文化的な知見がどのような結実をもたらしたかを検証する。研究分担者の山口惠里子は版画師漆原木虫について、職人/画家の漆原がロンドン・パリ画壇、収集家と築いたネットワークを明示する。研究分担者の林みちこは、ロイヤル・アカデミーで学んだ石橋和訓について、三井物産ロンドン支店の南條金雄（のちに三井物産会長となる）らの財界人の交友について精査する。研究分担者の水野裕史は、当該の時代を中心に英国で紹介された日本の古美術作品の再評価および古美術収集家のネットワークが日本近代美術の形成に重要な影響を与えたことを明らかにする。さらに、研究協力者の柳原一徳は、所属する島根県立美術館において、石橋和訓の初めての大規模回顧展を開催することを目標にして、林と連携しながら、日英の美術家・財界人ネットワークの調査を行う。

４．研究成果

(1)久米民十郎（1893-1923）についての研究成果として、研究代表者五十殿利治はモノグラフ『久米民十郎　モダニズムの岐路に立つ「霊媒派」』（2022 年）を上梓した。そもそも久米は日英美術交流において、イェイツの詩劇「鷹の井戸」上演（1915）に関わって、能を知らない詩人を前にして仕舞を舞ったとしてその名が言及される程度であったが、研究を進めた結果、とくに注目される点として、学習院卒業の久米は、いち早く国外に場を求めた郡虎彦を除くと、典型的な知識人の集団である白樺派とはほとんど没交渉である一方で、洋画界の大御所黒田清輝に接触した事実があるが、実際には別の人脈で、すなわち姉婿である五島慶太により、在英日本大使を務めた後に外務大臣となった加藤高明が外務省の用箋に認めた紹介状を得て、英国で活躍した画家・彫刻家エーミール・フックスに師事したことが判明した。またサードフォースという観点では、日本の近代美術史においては軽視されてきたオカルトと美術家との関わりが、久米の唱えた「霊媒派」の史的な位置づけを検証する、見逃せない課題として浮上したことを付言したい。久米は 19 世紀後半から欧米で隆盛した神智学協会の東京ロッジの最初期のメンバーとなっており、今後、とりわけ第一次世界大戦後の精神世界と関係づけて考察する必要がある。

(2) 研究分担者山口惠里子は、1910 年から 40 年までロンドンに滞在した木版画の摺師・彫師である漆原木虫（本名：由次郎、1888-1953）に関する調査研究を行った。19 世紀のジャポニズムでは日本のモチーフや浮世絵の彩色・構図を取り入れられたが、20 世紀初頭には漆原の技術を用いてイギリス人芸術家が木版画を制作するようになった。この木版画リバイバルを、職人・漆原の「サードフォース」としての木版画技術が推進したことは大きな意義をもつ。イギリス人版画家が選んだ主題の多くはパストラル（牧歌的風景）である。第一次世界大戦後の荒廃した風景を目撃した芸術家のなかに伝統的な主題に回帰する動きが生まれていた。この動きと木版画リバイバルは呼応する。漆原の木版画技術はパストラルの表現に適したものだった。山口は、同時期のエッチング・リバイバルでもパストラルの主題が選ばれていることに着目し、戦後のイギリス美術界における漆原の影響を明らかにした。漆原自身も 1920 年代以降に花や風景を主題とした木版画を自作し、一方でストーンヘンジを主題とした木版画も多数制作しており、山口はこれらの作品に関する論文を 2024 年度刊行予定であり、ブラングィンらとの共作についても今後研究を進める。

(3) 研究分担者林みちこは明治期に英国に留学した日本の洋画家、特に石橋和訓（1876-1928）の事績を調査した。肖像画家にとっての支援者は像主であることが推察できるが、実際に支援者として著名な日本人政治家・官僚・財界人・学者などが確認できた。金融都市としてのロンドンを舞台とした芸術家と日本人支援者のネットワークには、商社や銀行の駐在員の存在が際立っていた。社会構造の転換によって 1910 年以降の英国のパトロンは金融関係のビジネスパーソンや研究機関に所属する学者などのサードフォースつまり第三の勢力であったことを解明できた。また本課題によって日本近代絵画、特に日本画のイギリスでの受容についても新たな研究の可能性を見出した。初年度 2019 年にリヴァプールで調査した瀧和亭（1830-1901）の下絵コレクションはそもそも瀧の弟子であった石橋和訓が英国に持ち込んだものである。石橋が在英中に油彩画を学びつつも、日本画を平行して制作したことが判明した。明治前半期の洋画家が先に日本画を学んだことを鑑みると、海外における日本画の受容のサードフォース、つまり第三波には洋画家の「もうひとつの顔」とも言うべき日本画家としての姿があったことが浮き彫りになった。さらに研究協力者である島根県立美術館専門学芸員柳原一徳のイギリス出張が最終年度 2022 年度に実現し、公的機関および個人コレクターが所蔵している石橋和訓の作品の大半について熟覧調査が具体化した。石橋の出身県における初めての大規模回顧展が期待されている館との共同研究が成功したことにより、今後の研究成果の発表が見込める。

(4) 研究分担者水野裕史は、江戸時代における外交の史料を調査し、贈呈品として制作された美術品の背景について探った。幕府は、贈呈先の歴史や風俗に合わせて主題を選んでいたことを明らかにした。安政 3 年（1856）には、オランダ国王ウィレム 3 世から贈られた蒸気船の返礼として、江戸幕府は金屏風 10 双を贈った。その中の一つの狩野勝川院雅信筆「鷹狩図屏風」（ライデン国立民族学博物館）は、王朝風俗の鷹狩が描かれたもので、日本を象徴する題材として採用されたという先行研究の指摘がある。その指摘は首肯できるものの、海外の事情に合わせた可能性について検討した。新井白石『西洋紀聞』は、文化 7 年（1807）以降、広く流布し、狩野派の絵師たちも入手していた。『西洋紀聞』には西洋の鷹狩に関する記述が散見され、安政 3 年（1856）にオランダに贈られた「鷹狩図屏風」には、このような西洋の風俗に関する知識が下敷きとなって制作されたものと考えられる。本研究では、外交史、芸能史を踏まえつつ、江戸時代から明治時代における美術品の贈呈をめぐる制作背景について検証を行った。今後も、外交史料などを参考にしながら、日本美術と海外との関係について研究をすすめていきたい。

(5) 研究協力者の江口みなみは佐藤武造（1891-1972）を取り上げたが、その背景として 19 世紀末から 1920 年代までに英国滞在した日本人美術家について、特にロンドンにおける個展に注目した結果、画廊主との個人的な関係構築が必須のため、個展を開催できた者は少ないのに対して、佐藤による実績が稀有な事例であったことがあった。これを英語論文で明らかにしたが、今後、当時の在英日本人美術家コミュニティと英国の美術界との関わりを解明し、とりわけ佐藤が関係した挿絵画家デュラックや蒐集家ブラザートン卿、ロンドンの織物製造業に関する研究発展が期待できる。

(6) 国際共同研究の加速という点では、この間のコロナ禍において、日英両国の感染状況や対策の相異によって、大きな支障が生じたことは否めない。結果として、実施期間中において少人数の対面による研究交流でさえも限られていた。
その一方で、とりわけ海外共同研究者の渡辺とは、インターネットを通して研究の方向性や進捗状況の確認を行うのみならず、本研究課題による国内学会例会において発表者として参加が可能となって、少しく研究活動の促進が図られたことを強調したい。同じく、日本側の拠点である筑波大学において、連携先のセインズベリー日本藝術研究所所長サイモン・ケイナー教授を迎えての公開研究集会も本科研が主催し、対面による参加のほか、インターネット配信によって、国外からの参加者に向けても発信することが可能となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 林みちこ	４．巻 37
２．論文標題 展覧会評: Drawing on Nature: Taki Katei ’s Japan	５．発行年 2022年
３．雑誌名 藝叢	６．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柳原一徳	４．巻 3
２．論文標題 石橋和訓作《岡倉由三郎肖像》をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 島根県立美術館研究紀要	６．最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mizuno Yuji	４．巻 13
２．論文標題 Twelve Bronze Goshawks	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Falconry	６．最初と最後の頁 56-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口惠里子	４．巻 1
２．論文標題 漆原木虫 ―版画におけるパストラル・リバイバル	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）） 研究成果報告書 サードフォースの美術史　1880- 1920 ―在英日本人ネットワークの研究	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 林みちこ
2．発表標題 石橋和訓と在英日本人芸術家・政財界人のネットワーク
3．学会等名 明治美術学会第4回例会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Arisa Yamaguchi
2．発表標題 Transnational Dress as Imaginary: Japanese-Themed Fancy Dresses in Fancy Dress Described (1879-1896)
3．学会等名 Association of Asian Studies（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 五十殿利治
2．発表標題 霊媒派の画家　久米民十郎
3．学会等名 久米民十郎とグローバル・モダニズム
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 五十殿利治	4．発行年 2022年
2．出版社 せりか書房	5．総ページ数 333
3．書名 久米民十郎　ー　モダニズムの岐路に立つ「霊媒派」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山口　惠里子 (Yamaguchi Eriko) (20292493)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	林　みちこ (Hayashi Michiko) (40805181)	筑波大学・芸術系・准教授 (12102)	
研究分担者	水野　裕史 (Mizuno Yuji) (50617024)	筑波大学・芸術系・助教 (12102)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	渡辺　俊夫 (Watanabe Toshio)	イースト・アングリア大学・セインズベリー日本藝術研究所・教授	
研究協力者	柳原　一徳 (Yanagihara Kazunori)	島根県立美術館・学芸課・専門学芸員	
研究協力者	江口　みなみ (Eguchi Minami)	筑波大学・研究員 (12102)	
研究協力者	山口　有梨沙 (Yamaguchi Arisa) (90966699)	聖徳大学・文学部・専任講師 (32517)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	西澤　晴美 (Nishizawa Harumi) (50639854)	神奈川県立近代美術館・学芸課・主任学芸員	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Prof. Simon Kaner Open Seminor	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関